

ギニアグラスの栽培利用法
第2報 アトラジンによる雑草防除について

樋渡 隆・恒吉利彦・黒江秀雄・池田利徳 (鹿児島県畜産試験場)

Takashi HIWATASHI, Toshihiko TSUNEYOSHI, Hideo KUROE and Toshinori IKEDA :
Stabilized Cultivation and Utilization of Guinea Grass.

2. Weed Control of Atrazine for Guinea Grass

暖地型牧草は夏季に高い生産性を発揮するが、初期生育に難点があり、雑草に被圧され低収になることがある。そこで、アトラジン除草剤がギニアグラスの1番草に及ぼす効果について検討したので報告する。

1. 試験方法

1987年はギニアグラス「ナツカゼ」を6月11日に2.0 kg/10 a 播種し、アトラジン(製品量)100, 200, 400, 800 g/10 a を播種直後に土壤処理した。7月10日に発芽本数の調査を行った。刈取調査は8月5日に全区同時に実施した。

1988年は前年同様の処理に加えて、生育期処理を行った。処理量は製品量で100, 200, 400, 800 g/10 a とした。土壤処理は6月6日播種当日に、生育期処理は7月31日に行った。刈取調査は8月24日に全区同時に実施した。

2. 結果及び考察

1987年の結果では、播種後30日目の発芽本数を第1表に示した。薬量が増加するに従い減少し、400, 800 g 区では黄化、枯死等の薬害が認められた。乾物収量と牧草率は第2表に示した。無処理と100 g 区で雑草が認められた。乾物収量は薬量が増加するに従い減少した。

1988年の結果を第3表に示した。完全除草を除くすべての区で雑草の発生が認められた。土壤処理では、薬量と乾物収量の関係は明らかではなかった。播種直後に好天が10日間続き雨が降らなかったのが原因の1つではないかと思われる。雑草の発生量は、薬量が増加すると減少する傾向が認められた。生育期処理では、薬量が増加すると乾物収量が増加する傾向であった。800 g 区では黄化枯死等の薬害が認められたが収量は多かった。雑草の発生量では、アトラジンの量を200 g から400 g に増やすことにより著しく減少した。

3. 要約

ギニアグラスに対するアトラジン除草剤の使用法を検討した。播種直後の土壤処理では製品量として100~200 g/10 a, 生育期処理を行う場合は、200~400 g/10 a が適量と思われる。

第1表 アトラジン処理「ナツカゼ」の発芽本数

	(30日後・本/m ²)	
無処理	406 ± 9.1	
100 g	374 ± 34.3	
200	318 ± 16.4	
400	274 ± 12.4	
800	106 ± 11.3	

第2表 1番草の乾物収量と牧草率(1987)

	乾物収量kg/10 a			牧草率 %		
	ギニア	イネ科	広葉	ギニア	イネ科	広葉
無処理	450.0	96.0	28.0	78.4	16.7	4.9
完全除草	529.4	-	-	100	-	-
100 g	627.2	75.8	3.0	88.8	10.7	0.4
200	510.4	-	-	100	-	-
400	430.5	-	-	100	-	-
800	249.5	-	-	100	-	-
L S D	0.05	198.3	124.8	14.2		

第3表 1番草の乾物収量と牧草率(1988)

	乾物収量kg/10 a			牧草率 %		
	ギニア	イネ科	広葉	ギニア	イネ科	広葉
無処理	505.6	112.8	15.6	79.7	17.8	2.5
完全除草	803.2	-	-	100	-	-
土壤処理100 g	411.2	84.4	16.8	80.2	16.5	3.3
" 200	571.2	47.6	7.6	91.2	7.6	1.2
" 400	540.4	4.0	-	99.3	0.7	-
" 800	620.4	9.6	-	98.4	1.6	-
生育処理100 g	363.2	146.4	-	71.3	28.7	-
" 200	589.6	80.8	-	87.9	12.1	-
" 400	636.8	2.8	-	99.6	0.4	-
" 800	634.0	12.0	-	98.1	1.9	-
L S D	0.05	371.6	124.8	14.2		